

Shunan City Museum of Art and History
20th Anniversary



開館記念展開会式テープカット 左より 林忠彦長男・林靖彦さん、日本画家・澤野文臣さん、まどみちおさん、今野奎介 福岡放送代表取締役社長、小川亮 徳山市長(当時)

今日まで そして明日から

— 周南市美術博物館20周年 —

〈美博〉の愛称とともに20年。今では県内でも有数の美術館に育ちましたが、はじまりは建物が出る前の下地づくりからでした。

まずはこれまでの流れを振り返ってみたいと思います。

1980年代、経済も安定し人々の意識は物から心へと大きく変わり始めていました。

そんな時代「緑と文化と活力に満ちたまちづくり」を掲げ市政を担当されたのが小川亮市長(当時)でした。1982年にはそのシンボルとして徳山市文化会館(当時)が全貌を現します。メインは国際レベルの音楽ホールでしたが、県東部ではトップクラスの展示室(333㎡)も備えていました。

そこで立ち上がったのが「郷土文化シリーズ」です。郷土に関わりのある文化人や歴史資料を紹介する展覧会で、今ではお馴染みの洋画家・宮崎進、写真家・林忠彦、詩人・まどみちおも、そしてペールを被っていた徳山毛利家資料もここで初めて紹介することができました。また多くの方が所望された全国レベルの展覧会も誘致しました。なかでも1990年に開催した出光美術館所蔵「ルオー展」は、1万6362人もの入場を数えとりわけ美術に対する関心の高さに驚かされました。

こうした流れを受け世論はしだいに「わが街にも美術館を」に集約されていきました。そしてその夢はすでに計画されていた郷土資料館構想と合体し、1995年9月4日、徳山市美術博物館(当時)の開館をもって現実のものとなったのです。

三層の屋根をもつ地上2階、延床面積3603㎡の鉄筋コンクリート造りで、美術・写真・歴史の3部門からなる人文系の博物館でした。その後、登録博物館となり国宝が展示できる博物館施設としてもその重責を担っています。

運営方針は、文化会館時代に育んだものを中心になりました。ですからその顔となるコレクションには本市出身で日本を代表する作家群として前出の宮崎進、林忠彦、まどみちおの3人トリオと歴史ではこの地を治めていた徳山毛利家資料を核にすえました。その後、2003年には周南合併をはたし画家・尾崎正章資料も展示できるようになりました。

これまで様々な事業に携わって思うことは、美術館は、施設だけでは成り立たないこと。施設に人的な研究部門や経営部門などが加わった複合的な「機関」となりえてこそ最大限の力を発揮するということです。資料を調査・収集し、研究し、展示・保管し未来に伝えていくという大きな仕事です。ある意味では、周南の一時代一時代を次代に伝えていく唯一の公機関ではないかと思えます。

最後に現時点(1月31日)までのご報告を。皆さまに一番親しまれている「岸田劉生展」「安野光雅展」などの有料展覧会の開催数67回。そのうち、もっとも入場が多かったのは「やなせたかしの世界展」で2万7665人。開館以来すべての事業にかかるべ入場者数160万5971人。いかがですか、これが皆さまと〈美博〉がともに作り上げてきた今日までの歴史です。

いよいよ20周年。これまでのご支援、ご協力に感謝するとともにこの1年は、市民の皆さまに本市に美術館があることの意味を今一度考えていただければ幸いです。

(周南市美術博物館館長 有田順一)

周南市美術博物館20周年として、平成27年4月号から、職員ひとりひとりが綴る小さなコラムを1年間にわたって掲載します。ご期待ください。



開館20年を迎えて

① ワークショップ編

美術館の役割のひとつに「教育普及」がありますが、美術博物館が開館してから20年の間には、小中学校の完全週5日制の導入(平成14年)や「生涯学習」という観点から、この「教育普及」の中身がずいぶん変化してきたように感じます。作品を鑑賞するだけでなく、実際に作品をつくるなど「体験する」企画が多くなってきました。

美術博物館ではじめてのワークショップは、平成13年度に開催した日比野克彦展のときでした。大津島で一泊し、竹などを使って筏をつくり海に浮かべるという大規模なものでした。今では一般化してきましたが、当時は、「ワークショップ」という言葉自体も皆さんには馴染みがなく、説明するのに苦労したことを覚えています。

平成14年度からは、体験型の企画として、子どもたちを対象に「子ども芸術ワークショップ」を始めました。

針穴写真機(ピンホールカメラ)を作り撮影(14年度)。バルサ材をカッターで削り、絵の具で色づけして友だちの顔をつくる(15年度)。粘土で型をつくりそこに石膏を流し込んで自分の顔をつくる(16年度)。現代美術作家とともに身の回りの不用品を使って自由な発想で作品にする(17年度)。素焼きの皿に絵付け(18年度)。じゃばら式絵本づくり(19年度、23年度)。や金属を使ったモビール制作(20年度、24年度)。目隠しをして粘土での彫刻づくりを体験(25年度)。そして、今年は石や土などを砕いての顔料づくりといったようにさまざまなテーマで行ってきました。

作家に直接アドバイスしてもらいながらの作品づくりは、貴重な体験です。この体験を通して、美術に親しみをもちてもらえたらと思います。

(松本久美子)



24年度



23年度



18年度



17年度



16年度



15年度

開館20年を迎えて

② さまざまな作品がやってきた編

周南市美術博物館では、本紙3月号でも紹介したように、これまでに有料の展覧会を67回開催し、様々な作品や資料を展示してきました。今回はその中から、当館にやってきた国宝や重要文化財、重要美術品について振り返ってみたい。

まず最初は、平成10年度に開催した「大和まほろば展―大和王権と古墳―」。藤ノ木古墳出土の棘葉形杏葉などの馬具や須恵器、島の山古墳出土の石製合子などの重要文化財が展示されました。

平成12年度に開催した「絵画への招待―人・街・宇宙―」は、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立国際美術館所蔵の洋画を紹介した展覧会で、重要文化財「エロシエンコ氏の肖像」(中村麟作)が展示されました。

また平成15年度開催の「川端康成文豪が愛した美の世界」では、国宝の池大雅「十便図」・与謝蕪村「十宜図」・浦上玉堂「凍雲篩雪図」が展示されています。

近いところでは、平成25年度開催の「茶の風景 出光美術館名品展」で、重要文化財「赤染兔文香合」(本阿弥光悦作)、「絵唐津葦文水指」、重要美術品「山水図」(伝周文)などが展示されました。

国宝級の資料を展示するためには、温湿度や照度、空気環境、警備や防災体制などがきちんと整っていないとばなりません。当館はそのため、日々管理を行っています。作品によっては室内が暗くて見えにくかったり、観覧中に決まりごとが多いのも、大切な資料を後世に伝えていくために必要なことです。この点をご理解いただき、これからも素晴らしい展覧会を開催できるよう、皆さまと一緒にこの館を創り上げていきたいと考えています。

(森重祥子)



茶の風景展より「赤染兔文香合」



川端康成展より「凍雲篩雪図」



絵画への招待より「エロシエンコ氏の肖像」



大和まほろば展より「棘葉形杏葉」

開館20年を迎えて

③ わくわくドキドキ探検ツアー編

今年で9回目となる「探検ツアー（P2参照）」は、今年から9年前の平成18年に始まりました。それまで美術博物館は、展覧会が事業の中心でしたが、教育普及にも力を入れたということ、小中学生とその保護者の方を対象にした探検ツアーを始めました。「普段見ることのできない美術館の裏側を見てみよう」というこの企画は、当時県内でも先駆けとなる試みでした。

第1回目は「作品がとおるみち」をテーマに、学芸員の解説で作品が入ってくる場所を見学したり、作品を守るために必要な温湿度管理をする空調の機械室を見学したりしました。また「展示に挑戦！」として掛け軸の取り扱い体験もあり、初めての経験にみんなドキドキしながら取り組んでいました。

そのほか、作品を運ぶ大きなエレベーターに乗ったり、「動くおもちゃ」を作ったり、毎回みなさんに楽しんでいただけているよう工夫しながらすすめている「探検ツアー」ですが、一番の特徴は、親子で参加できることです。学芸員の解説でわからない所があったら、親御さんから子どもさんへかみくだいてお話をさせていただきます。その中で、わからないところがでてきたら学芸員に質問してもらいます。そういった会話のやりとりの中で、ものを探求することの楽しさが生まれてきます。ものごとをより面白くしたり、経験を豊かなものにするのは自分自身なのだという意識が芽生えれば、人生もより豊かなものになると思います。今年の探検ツアーも、素敵な花を咲かせるためのお手伝いのできたらいいなと思っています。

（今井良枝）



地下にある機械室の探検



掛け軸の取り扱い体験

開館20年を迎えて

④ 施設編

見えにくいところで館を支える

平成7年6月。私は新しく開館する美術博物館の管理担当職員として配属されました。舞台や音楽関係の職場から美術や歴史という未知なる世界に入り、ましてや管理事務の立ち上げという重責に、戸惑いながらも奔走していたことは懐かしい思い出です。

美術博物館が最も重点を置いて取り組んでいる事のひとつに、展示・收藏環境の維持があります。変動のない一定した温湿度と気流やPHのコントロール。作品に影響が出てからでは間に合わない、タイムラグの無い安定した完璧な空気環境。

私は事務の合間に設備の構造やメカニズムの勉強を始めました。煙たがられながらもメンテナンス技術者の作業について歩きました。おかげで空気環境のメカニズムを理解できるようになりました。深夜の故障で、機械を手動で制御しなければならぬときも、対応することができました。

空気環境の管理は、作品の保存にあたっては要です。いまでは空調設備の性能が十分発揮され、安定した成果をあげています。

現在まで20年間、収蔵品や展示品に損傷を与えることなく、国宝も展示できる県東部唯一の美術館として運営を続けられたことを誇りに思っています。

（西村達也）

開館20年を迎えて

⑤ サロンコンサート

美術博物館の音楽会編

美術博物館のサロンコンサートをご存じでしょうか。

おもに、春は桜の頃、冬はクリスマス頃の頃に開催しています。クリスマスサロンコンサートは県内でもいち早く平成11年に開始しました。春のサロンコンサートは、平成17年に近隣で開催された桜街道祭にあわせてスタート。クリスマスや桜など季節のイベントとともに、展覧会に親しんでいただけるようにと担当の先輩達が知恵を絞りました。

内容もとりどりで、管弦楽、邦楽、ギター、マリンバ、ピアノ、ソプラノ、アンサンブル、フラメンコ、合唱、ヴァイオリン、シャンソン、声楽、ビッグバンド、ハワイアン、ジャズ、クラシックサクソフォーン、打楽器など：数々の音楽が、展覧会のイメージにあわせてロビーに広がりました。

コンサートは年に複数回行うこともあり、これまでの間に、クリスマスが32回、春は10回を数え、約1万人の方々にご好評を頂いています。また、この他にも随時開催しています。

昨年はロビーに置かれた彫刻作品にあわせてスタンディング形式を実施するなど、進化も続けています。

みなさんの心に残る展覧会をより印象深くするために、素敵な音楽をお届けできるようにこれからも工夫していきます。

（笹川はるな）

印象に残っているのはどんなコンサートでしょうか？（写真は一部です）



H27年4月



H26年12月



H22年12月



H21年12月



H19年12月

美術博物館 20年のあゆみ 20th Anniversary

開館記念の「近代絵画の流れ展」から現在開催中の「みんなの大幹線展」までの展覧会の開催数75回*。このうち、もっとも入場者数が多かったのが「やなせたかしの世界展」(平成17年開催)で、2万7,665人です。開館以来すべての事業にかかる延べ入場者数164万3,217人(平成27年7月末現在)。みなさんの心に残る展覧会はどれですか。周南市美術博物館はおかげさまで20周年を迎えました。これからもご支援よろしく申し上げます。(※このうち有料展覧会の開催数は69回)

平成7年度
1995



平成9年度
1997

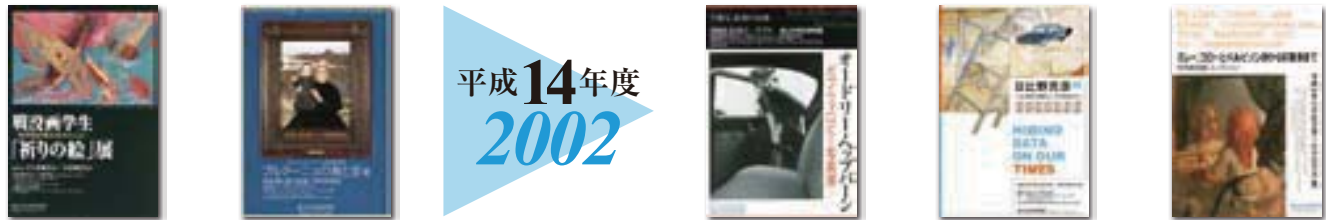


平成11年度
1999



平成12年度
2000

平成14年度
2002



平成17年度
2005



平成20年度
2008



平成23年度
2011



平成26年度
2014



平成8年度
1996



平成10年度
1998



平成13年度
2001



平成15年度
2003



平成16年度
2004

平成18年度
2006



平成19年度
2007

平成21年度
2009



平成22年度
2010

平成24年度
2012



平成25年度
2013



平成27年度
2015



開館20年を迎えて

6 ミュージアムグッズのめぐり

当館のミュージアムショップは、正面ロビーの一角にあります。開館以来多くのお客様から親しまれています。現在は、ゴッホや、モネ、クリムトなどのアートカードの他、しおり、展覧会図録、まど・みちおの詩集、写真集などを取り揃えています。また、秋にはアートカレンダーを、クリスマスが近づくと、クリスマスカードが並び、毎年楽しみにされている方もあり、商品の仕入を担当している者としてとても嬉しく感じます。

ミュージアムグッズの中でも特におすすめなのが、周南市美術館にしかないオリジナルグッズです。郷土出身の画家宮崎進、詩人まど・みちお、写真家の林忠彦の当館所蔵の作品のポストカードをはじめ、クリアファイル、一筆箋などがあります。

ここで開館時のグッズを振り返ってみましょう。林忠彦記念室に再現されているバー「ルパン」のカウンター（銀座のバーで、林忠彦が主宰を撮影した場所）で有名です。を絵柄にした便箋、「ルパン」のカウンターにあるランブを刺繍したミニサイズのハンカチ、テレフォンカードなどがありません。現在は、これらのグッズはありますが、お持ちの方はいらっしやるでしょうか。

「絵を見て元気が出ました。友人にもぜひ伝えたい。」と、ポストカードや、図録をまとめて購入される方、「講演会のプレゼントに。」と詩集を購入される方：作品を見た時のわくわく・どきどきした気持ちを形にし、周りの人にも伝えられるミュージアムグッズは、来館記念の他、贈り物としても最適です。

また、美術館にはあまり来られたことのない方も、ミュージアムグッズをきっかけに美術館に興味を持っていただけたら嬉しいです。展覧会のもう一つの楽しみとして、ぜひミュージアムショップや、喫茶をご利用下さい。皆様のご来館をお待ちしています。

(磯村)



▲開館当初のグッズ



▲まど・みちおポストカードセット

開館20年を迎えて

7 コレクション編

9月27日（10月11日に再放送）のNHK「日曜美術館」で美術館が収蔵しているまど・みちおの抽象画が紹介されました。みなさん、ご覧になりましたか。

以前にも、NHK「日曜美術館」では、当館の名誉館長である宮崎進の作品が取り上げられたことがあります。

コレクション（収蔵作品）は、その館の特色を示すものです。

美術、写真、歴史の3つの部門をもつ美術館のコレクションを紹介すると、美術では、周南市出身の画家宮崎進、詩人まど・みちおの絵画、ここが終焉の地である岸田劉生のほか地域にゆかりのある作家の作品。

写真では、周南市出身の写真家林忠彦をはじめ、今年で24回目となった林忠彦賞の歴代受賞作など。

また歴史では、国指定重要文化財の陶弘護像や徳山毛利家資料など。

これらの作品は購入したり、寄贈いただいたり、預けて（寄託）いただいたりしたものです。毎年資料収集委員会、収蔵するにふさわしいかどうかが審議され、正式に収蔵品となります。

開館20年を迎えた現在の収蔵作品数は、3部門あわせて1万1千点を超えています。これこそが、「周南の宝」です。

これらの作品について、調査研究を進め、その成果を展覧会やその他の事業でみなさんにお伝えするとともに、私たちの子どもや孫、さらに先の世代までよい状態できちんと守り伝えていくことが美術館の使命だと思っています。

(松本)

美術館の三大コレクションである宮崎進、まど・みちお、林忠彦の作品。



宮崎進「花咲く大地」



林忠彦「太宰治」



まど・みちお「風のネックレス」

開館20年を迎えて

8 カフェテラスまじから



美術館のエントランスへのスロープを下りていくと、緑に囲まれ、ミスと噴水池に面した全面ガラス張りのカフェが見えてきます。開館以来、多くのお客様にご利用頂き、展覧会に来られた方だけでなく、たくさんの方連のお客様にお茶の時間を楽しんで頂いています。

店内入口には、イギリス・コルポートの100年前のカップやリモージュなど、36種類のアンティークカップが並ぶショーケースがあります。これは、出光美術館所蔵「陶磁の道」(2007年)開催にあたり、マイセンなどの歴史ある磁器を使って、挽たてのコーヒーを提供しようと始めたサービスです。お客様にこの中から好きなカップを選んでいただくことができ、今でも大変喜ばれています。

これまで、展覧会にあわせた限定メニューも登場しました。

リサとガスボール展(2011年)では、家族で楽しんでいただけよう、あつたかワッフルとひんやりクレープ、岩合光昭写真展「ねこ」(2013年)では、ねこの足あとをイメージした温かいラテカフェにヤチを。2014年11月の常設まじ・みちおコーナーのオープンにあたっては、まじ・みちおコーナーの新メニューが登場しました。現在開催中の「まじ・みちおのうちゅう」限定メニュー「ふわふわほうじ茶ラテ」も好評です。(2P参照)

大きな窓に囲まれたゆとりの空間「カフェテラスまじ」。その前にひろがる新緑や秋の紅葉、雪化粧などの四季折々の景色と、噴水池の水の造形が心を和ませてくれます。これからも、香り高いコーヒーとゆったりと流れる時間を楽しんでいただけますよう、スタッフ一同心よりお待ちしております。

(西村真美)



小さなまじセット



カフェにヤチ



ひんやりクレープ



アンティークカップ

開館20年を迎えて

9 美術博物館がオープンした頃の私

1995年：今から20年前の私は、年明けに高校受験を控えた市内の中学3年生でした。私が通っていた中学校は文化会館から徒歩約10分と近い距離にあり、また中学校音楽祭でそのステージに立ったりなど年に1度は必ず訪れる身近な場所でした。

夏休みも終わり2学期に入った直後の9月4日、美術博物館がオープンするということで、文化会館で開催された開館記念式典に3年生が代表で出席しました。今思えば自分が住んでいる町に新たに文化施設ができるのは、とてもすばらしく恵まれたことだと痛感するのですが、そのときは深く考えることなく、ただほんやりと式典の様子を眺めていました。

その途中、ある人物の名前が呼ばれました。「まじ・みちお」さん、当時すでに80代半ばです。郷土の芸術文化の振興にご貢献下さり、来賓としてご出席されていました。幼い頃「ぞうさん」や「いねんせい」になつたら」など、誰もが歌ってきた童謡の詩を書かれた人。そんな方が目の前にいることにひとりで驚いていました。ほかにも来賓の方がいらつしやいましたが、なぜかまじさんだけが今でも強く記憶に残っています。

それから20年が経ち、現在当館では「まじ・みちおのうちゅう」展を開催しています。式典以降まじさんのお姿を拝見することはありませんでしたが、美術博物館の業務に携われるとは思っていませんでした。何か不思議な縁を感じます。

そして、ロビーではこれまで開催してきた展覧会のチラシを掲示中です。私が来館者として観覧した展覧会の中で印象深いのは、2002年の「オードリー・ヘップバーン」の写真展と2006年の「世界遺産写真展Ⅲ」です。みなさまもこちらにお越しの際は、美術博物館が歩んできた歴史と共にぜひ20年を振り返ってみてください。

(野村)



展覧会チラシ掲示中



美術博物館開館記念式典 1995年9月4日 文化会館において



建設中の美術博物館

開館20年を迎えて ⑩—20年間のできごとあれこれ編—

これまで展示した作品の中で一番大きかったのは、「出光美術館所蔵サム・フランシスと仙厓」展（平成9年度）で展示された、サム・フランシスの「上部にレッド・ベルリン」。縦366.0×横825.0cmです。



丸めて運ばれてきた作品を展示室で木枠に張り、組み立てて展示しました。



フォークリフトを使って搬入

一番重たかったのは、「三沢厚彦展」(平成26年度)で展示された「Animal 2010-1」。木彫の作品で重量は約1.5tありました。

こんなユニークな展示もありました。



「徳戸千津子展」(平成10年度)では、館外の池に彫刻を展示



「日比野克彦展」(平成14年度)では、工事現場のような足場を展示室に建てて作品を展示しました。



一日の入場者数が最も多かったのは「岩合光昭写真展」(平成25年度)の2,524人でした。会期中の入場者数が最も多かったのは、「やなせたかしの世界展」(平成17年度)の27,665人。

高円宮妃殿下をはじめ、たくさんの著名な方々が来館されました。栗原小巻さん、フジコ・ヘミングさん、森次晃嗣さん、中井貴恵さん、市川実日子さん、古川薫さん、福田靖さん、貞本義行さん、まど・みちおさん、笹戸千津子さん、澤野文臣さん、佐藤忠良さん、日比野克彦さん、ヤノベケンジさん、葉祥明さん、与勇輝さん、中島潔さん、いもとようこさん、黒井健さん、いわむらかずおさん、三沢厚彦さん、細江英公さん、岩合光昭さん、秋山庄太郎さんなど林忠彦ゆかりの写真家たち、南極観測船しらせの艦長さん など、まだまだ挙げればきりがありません。こんなうれしいニュースもありました。平成8年には、林忠彦賞が日本写真協会の文化振興賞を受賞。平成22年には、「まど・みちお えてん」の図録が美術館連絡協議会のカタログ賞を受賞しました。

開館20年を迎えて

最終回 美博の宝まつりの『ぞうさん』を仙厓く。

一年間リレーしてきたコラム、いかがでしたか。いよいよ今回が最終回です。

〈美博〉には、さまざまな使命がありますが、やはり第一は、後世に残すべき資料を収集することです。そして保管し、調査・研究し、公開することです。

これを柱に、特別展、企画展、常設展などの展示活動があり、それを取り巻くように各種講座、ワークショップ、サロンコンサートなどの普及活動が広がっています。

20年目のささやかな感想です。

当初、〈美博〉には目玉になる資料はありませんでした。そこで打ち出したのが、当市出身の洋画家・宮崎進、写真家・林忠彦、詩人・まど・みちおの3人です。彼らの資料を重点的に収集し全国に発信しようとした。しかし、全国は広い、なかなか定着しません。どうしたら分かってもらえるのだろうか。幸い、童謡「ぞうさん」は、誰もが歌える名作。その作詞者の絵なら興味を沸くのでは…。

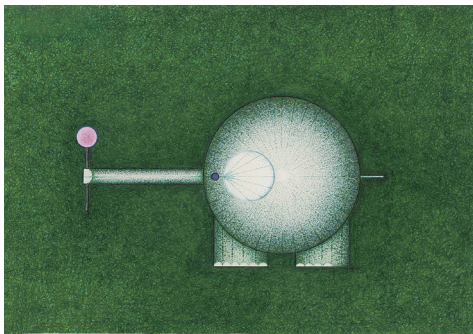
そこで、まどさんの絵画に限っては、年1回は必ず公開するとういう方針を貫きました。その甲斐あってか2000年代に入ると、様々なところで取り上げられるようになりました。そして、今回、20周年記念展として「まど・みちおのうちゅう」を開催しました。

嬉しいことに、今年4月、仙台文学館での巡回展が決まりました。実は、〈美博〉の資料を核に、〈美博〉が監修した展覧会の全国巡回は、これが初めてです。20年目にして、ようやく収集資料の真価が出始めました。〈美博〉の仕事は、一朝一夕にできるものではありません。息の長い仕事です。これを見守ってくださいしたのは、偏に市民の皆さまのご理解とご協力の賜物であると思っております。

4月からは、21年目に入ります。これからも〈美博〉とともに大きな夢をかたりませんか。明日の周南がもっと大好きになるように。

(周南市美術館館長

有田順一)



「ぞうさん」 私も仙厓にいます。